

## § 摘要、考察

もづくの生物学的研究もあまりなされていないようで、今後の調査は興味あるものである。

1月から3月までもづくの発生、生長があり、4月以降、成熟し、繁殖期に入るものと推察された。もづくは前述のように「あまも」又は「すがも」の他の植物に附着生育していたのであるが、地元民の言ではサンゴ礁中にも多数附着するといふ。未だ確かでないが、これら生態的調査もこれからというところである。

## ふのり成熟期調

(新村、豊田)

### § 趣 旨

本群島の西北海岸には主として「はなふのり」が着生し、僅かながらも利用されている。はなふのりは、ふのり類中에서도良質の糊料を含有していることは周知であるが、本群島では、比較的かえりみられない。従つて利用増殖啓蒙の基礎資料を得るため、その生態特に成熟期の調査を行った。

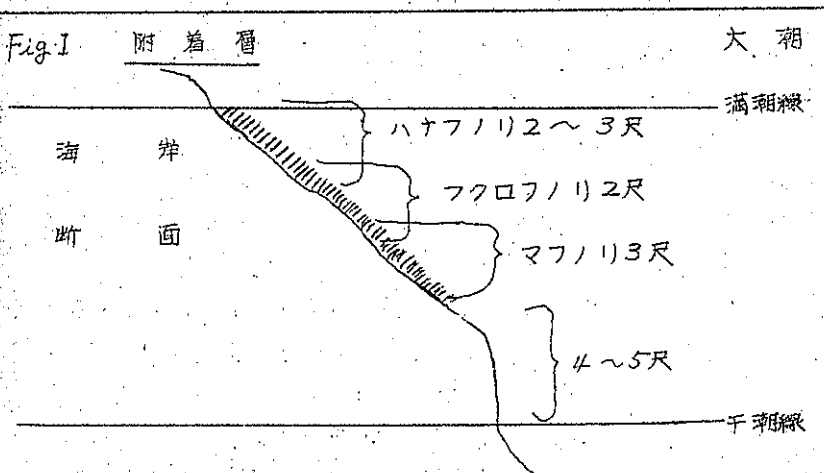
### § 方 法

1. 現地調査 実久村江に屋島、徳之島周辺一帯
2. 成熟状態調査 乗藻採集後、翌日まで陰干し、半乾燥せしものを、次の要領で実験した。
  - 原藻 10gr を、新鮮な海水 2 lit. に投入し、30分後にスライドガラスに胞子の附着した量を算定した。(1 cm<sup>2</sup> 当り)

### § 調 査 結 果

#### ◎ 生育地

○ 実久村江に屋島では、北西向の岩礁面に密生している。はなふのりは大潮、満潮線直下より



3天附近まで  
ふくろふのり  
は満潮線下2  
尺~4尺の  
間、まふのり  
は満潮線下4  
尺~7尺の  
間で、各ふの  
りとも2~3  
尺の生育層が  
認められた。

まふのりの最下生育線は、大潮干潮線上4~5尺附近にあつた。

又、サンゴ礁にも生育していたが、サンゴ礁は概して干潮線附近に発達しているのを、附着層をはずれ、小さいものである。

○徳之島周辺では、サンゴ礁の隆起発達が著しいため、金見崎、大田布岬附近ともサンゴ礁上に生育していた。尚岩礁にもかなり、附着しているのも見受けた。尚岩石がサンゴ礁間に半分埋没しているところは、附近のサンゴ礁より、一層多くのふのりかきの岩石に附着していることから、岩石には附着しやすい傾向がうかがえた。

### ◎ 生 熟 期

Table. I ふのり胞子放出量 (1 cm<sup>2</sup> 当り附着数)

調査日	原藻採集地	ハナフリ	フクロフリ	マフリ	備 考
3月5日	江に屋高島	0	5.0	—	実験水温20.4°C 比重24.6
3月19日	笠利村	0.5	9.28	—	20.4 24.5
3月28日	江に屋高島	1.9	70.7	2.5	22.3 24.0
"	金見崎	19.8	—	—	21.3 25.0

### §. 摘 要 考 察

- 放出実験については、海水20.4°C に対して原藻1.0 gr の割合が少く、胞子の附着頻度が小となり、算定に困難を極めた。
- 従つてこの種の調査には海水に対する原藻の割合を大にして、スライドガラスの附着量を多くして平均をとるようによすべきことを得た。
- はなふのりの成熟状態は3月下旬で初期に入ったと推察された。
- ふくろふのりは3月下旬に盛期に在ると認めた。即ち原藻は、殆ど黄白色系となつていた。
- まふのりは今回の調査では判然とした資料が得られなかつた。
- はなふのりの体長は3月下旬で最高20 mmであつた。ふくろふのりは30 mm内外が普通であつた。まふのりは20~30 mmで体は細く、径0.5 mm以下で、本土周辺産のものに比し、ふくろふのり、まふのりともかなり極小である。
- 以上のように3月までの調査結果では確実な結論は得られない。

## 浅海資源分布調査

梅井、豊田、新村

### § 趣 旨

本群島における浅海資源の分布状態は明らかでなく、増殖指導をなすにも支障を来たすので、あらゆる機会を利用して、その分布を調査している。而して長年限をかけても正確な資料を得て、群島全般の分布図を大成する計画である。

本年度は瀬戸内地区、与路島、讃岐、徳之島地区の調査を実施した。

尚本調査は昭和30年4月1日から11月30日迄は梅井技師、豊田産、12月1日から3月31日までには新村技師、豊田産によつて実施したものである。